JISS 社団法人スウェーデン社会研究所
Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies
社団法人スウェーデン社会研究所のHPはこちら
JISS所報－No.332－2005.9.30

所報
The Japan Institute of Scandinavian Studies

Index

・目次
・スウェーデンと日本
・スウェーデンの育児環境
・39回、40回スウェーデン研究連続講座
・スウェーデン人の見た日本、日本人の見たスウェーデン
・随想
・JISS所報原稿募集

■ 目次

・スウェーデンと日本

・スウェーデンの育児環境

・39回、40回スウェーデン研究連続講座
〔39回〕
ストリンドベリーをめぐる私の詩想
〔40回〕
人間工学を核にした機能と美しさを叶えるエルゴノミデザイン

・スウェーデン人の見た日本、日本人の見たスウェーデン
・インターンシップを通して見た日本の会社生活
・企業内に見るスウェーデン人の性格

・随想
・スウェーデンの坊やと湖そして僕の夢

・JISS所報原稿募集

スウェーデン社会研究所　所報
No.332 2005年9月30日発行

発行所：社団法人スウェーデン社会研究所
〒105-0013　東京都港区浜松町1-8-1
㈱科学新聞社内5階

連絡事務所
〒124-0024　東京都葛飾区新小岩2-19-7
Tel. 03-5661-6035 Fax. 03-3655-1596
e-mail sweden@tkm.att.ne.jp
URL: http://home.att.ne.jp/apple/jiss/jiss.htm

発行人・編集責任者：波多野裕
Publisher&Editor in Chief : Yutaka Hatano
編集者：久保田健司
Editor : Kubota Takeshi

JISS 社団法人スウェーデン社会研究所
Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies
JISS所報－No.332－2005.9.30

目次へ戻る

スウェーデンと日本

スウェーデンと日本

（財）企業活力研究所理事長
元JETROストックホルム事務所長
土居　征夫

今から31年前の1974年6月、ミッドサマー・デーの祭りが始まった初夏のストックホルムに降り立った私は、ぬけるような青空とすがすがしい空気、歴史と伝統のある街並み、率直で暖かい人柄の住民に出あい、すばらしい国に来たと感激したことを覚えています。海外駐在では第一印象がその後の滞在を幸福にするか否かの鍵を握っているようです。
11月に着任したある日本人ビジネスマンは、アルランダ空港からストックホルム市内への高速バスの車窓から、草が枯れて岩盤が顔を出し、雲が低く垂れ込め、暗い針葉樹が覆いかぶさる風景を眺めながら、厳さに胸を締めつけられて「いよいよ地の果ての国にやって来た」と感じたと聞きました。私の場合は全く逆で、すばらしいスウェーデンでの第一歩は、すばらしい3年3ヶ月の滞在につながるものでした。

スウェーデンの人達について、思い出す友人、街で出会った庶民、仕事でお会いしたビジネスマンから共通するイメージは、冷静、率直、穏やか、柔軟、フェアー、クリーン、論理的、合理的、質実剛健、直球勝負等々の言葉が浮かんできます。日本人のような集団や組織への甘えはなく、何よりも一人一人が、自立した人間であることに好感を持ちました。スポーツの試合などを見てもフェアーで、粗野なプレーや悪質な違反は見られません。3年間の滞在により、スウェーデンという国はこのような民族性一つをとっても、日本が手を握っていくべき重要な国だと確信するに至りました。

しかし、私が滞在した30年前は、日本についてのネガティブなイメージも多く、通産省から派遣されたJETRO駐在員としては日本に対する誤解を解くことが最大の課題となりました。当時は日本に対する情報自体量が少なく、また在っても偏ったもので、「日本の産業は公害を撒き散らかしている」「東京には木が一本もない」「大気汚染で街を歩くときはマスクが必要」「日本の政治には民主主義はなく、海外に革命家（赤軍）が逃亡している」「日本の高度成長は労働者の抑圧の結果である」等々今日では考えられないような日本に対する誤解が蔓延していました。JETROの広報活動だけでは限界があり、最後の手段として有力なジャーナリストに日本に行って取材してもらうほかは無いと考え、実行しました。スウェーデンから数人の記者が日本の各地を取材訪問しましたが、これは大成功でした。やはり、「現地・現物」が重要で、現地へ行って、現場を見て、生身の人に会って、社会の空気を吸わないと、実際の理解は進まないものです。その意味で、その後の両国間の人の交流の拡大は、相互理解に大きな役割を果たしていると考えます。

今、日本は選択を迫られています。少子高齢化に向かう日本の社会保障制度は、このままでは将来の負担増に耐えられません。制度自体は、高福祉国スウェーデンに引けをとらないほどに充実してきましたが、逆にそのことが日本社会の発展の足を引っ張りつつあるという見方があります。これまで税金＋社会保障費＋財政赤字の対国民所得比である潜在的国民負担率は、1970年代には20％台、80年代以降は30％台をキープしてきましたが、95年以降40％を超え、このまま推移すれば早晩50％を超え北欧諸国並みに増加する勢いを示しています。しかし、公的負担が増えすぎると社会の活力が阻害されるとする議論は根強いものがあります。そこで大きな政府より小さな政府を目指し、まず社会保障も含め国家支出を縮減・合理化すべきだということになります。21世紀の日本社会は、国民負担率の増大が不可避だとしても、行政改革による支出削減を通じてそれをGDPの50％以下に押さえ、プライマリーバランスを回復するという選択肢を採用しつつあります。

政府部内では、21世紀の日本のあり方が真剣に議論されています。英米型の資本主義モデル、北欧型の社会民主主義モデル、これまでの日本型の産業企業主義モデルに変わる第四のモデルが模索されています。国民負担率は上昇せざるを得ないとしても小さな政府にし、民間が

公共分野を担っていくモデルです。しかしながら、私見では行政改革を如何に進めても少子高齢化で財税負担は増えざるを得ません。国民負担率は今より大幅に上昇せざるを得ないと考えます。

しかし私は、日本社会のこれからに悲観していません。強い産業の国際競争力さえ維持できれば、高福祉高負担の国家はサステナブルであるという例を、スウェーデンが実現し証明しているからです。実際、スウェーデンで学んだことは、福祉社会を支える基盤としての産業の強さです。福祉国家の高負担を支えるには強力な産業が必要だと言うことです。造船、鉄鋼、精密機械、自動車等の国際競争力のある産業が、いまIT産業やソフト産業などにシフトしながら大きくスウェーデンの社会保障制度を支えている事実は日本にとって貴重な教訓になります。国民の負担を高めると経済の活力を殺ぐという議論も正しいのですが、そのような縮み思考ではなく、日本も高い社会保障水準、高い国民負担に耐える国際競争力のある強い産業を維持していかなければならないと考え、より積極的な産業活性化の戦略を打ち出していかなければならないと考えています。

目次へ戻る　このページのTOPへ戻る

JISS 社団法人スウェーデン社会研究所
Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies
JISS所報－No.332－2005.9.30

目次へ戻る

スウェーデンの育児環境

スウェーデンの育児環境

織田紀子

いよいよスウェーデンへ赴任か？！ 夫の仕事の都合で赴任地が決まりそうな2002年の冬から、私はこのスウェーデン社会研究所のスウェーデン語講座にお世話になり、現地での生活の準備を始めていた。半年間、楽しく学ばせて頂いた矢先に妊娠が判明し、出産を待っていたかのように辞令が出た。生まれて間もない我が子を飛行機に乗せ、スコーネへ辿り着いたのが2003年の夏のこと。それから2年、私は育児という自分にとって初めての体験を、スウェーデンですることになったのである。

今、スウェーデンはベビーブーム。習い事をさせるにも、保育園に入れるにも半年も前からの申請は当たり前。入れないという事態もしばしば見られる。女性が子供を産まないことを悩む日本とは大違い。
そもそも日本とスウェーデンは根底が違うので、出生率を上げるためのモデルを日本が真似ようとしても、スウェーデン流をすんなり日本に浸透させるにはかなりの無理があるとは思うのだが・・・しかし見習って欲しいと思う部分は多々ある。

一つは、育児休暇の制度。父親も母親も最低数ヶ月の休暇を取らなければいけないシステムになっている。
「休暇を取ってもいいですよ」という任意の休暇ではなく、自分の子を育てるのだから「休暇を取りなさい」という義務行為。そして生活が苦しくならないよう税金から生活費が支給される仕組みになっている。そして堂々と休暇を取り、堂々と職場に戻れること。その裏側には専業主婦の存在が無いということも大変重要だろう。スウェーデンでは、男女共に働くということが前提だ。家事や食事作りも勿論分担制。男性が作る家庭料理もこれまた美味しい。
勿論、専業主婦も育児も立派な仕事ではあるが、収入を得て納税することが基本のスウェーデンでは、これらを「仕事」と言い切るには勇気が要る。1歳から保育園に入れることができ、早朝より夜は21時くらいまでやっている。先生達も交代制だ。「子供がいるから働けない」という理由もまた、この国では通らない。

そして、もう一つ。子供を産もうと思うことに躊躇がない理由は学費が無料ということ。
小学校から大学まで学費が無料ということになっている。ローンを組むという表現の方がいいかもしれない。日本のように、親が子供の教育費を工面する必要がないのだ。子供達は自分の努力次第で学びたいだけ学べるし、行きたい学部に行ける。そして就職した際にお給料から今までの学費等を税金として引かれるのだ。
日本がこれをモデルにするには、現在いるすべての専業主婦に仕事を与えなくてはならず、また育児休暇のシステムと、子供を預かる場所の普及、そして学費や老後の心配を税金によって軽減させる必要があるのだから、大きな仕事だ。

一年ぶりに一時帰国をした時のこと。日本の育児環境をあまり知らなかった私は、日本の不便さを知って愕然とした。
エレベーターの普及が遅れている。右往左往する街中ではベビーカーが邪魔者扱い。微妙な段差。手を貸してくれない大人達。一体何をそんなに急いでいるの？
自分の国なのに育児をすることが難しいと思ってしまう。過酷だと思った。私はすっかりスウェーデンのゆったりとした感覚が身についてしまったようだ。一時帰国で子持ちの友人達と会う約束をするものの「移動が面倒なの。電車へ乗り降りするまでが大変だから、子供は預けるわ。」の言葉。子供達を囲んでの再会はまだまだ遠い先になりそうだ。

私がスウェーデンでの育児がノビノビと自由であることを感じたのは、ベビーカフェという存在。行政が親と子が一緒に遊べる無料のスペースを提供してくれている。同じ年齢の子供の様子を見ながら、育児の喜びや悩みを専門の先生に話しながら、私は初めての子育てを異国の地で経

験していく。

この地に来てから、ずっと子供と一緒。子供が寝てくれない夜があった。何が欲しいのか分からない日があった。私の疲れがピークに達していた頃、ベビーカフェの先生からこんなアドバイスがあった。「子供と一緒にいる時間が長いからといって、それがいい育児とは限らないの。たまには人に預けて母親が自分の時間を持ち、リラックスすると、また穏やかな育児ができるもの。一人で抱え込まないで、ベビーシッターを探してみるのも一つのやり方よ。」
人に預けて自分の疲れを癒す・・・一瞬、育児放棄をするようで悪い母親なのではないかと頭をよぎる。でも確かに言われる通りだった。疲れ果てた母親には笑顔が出ない。私はこのベビーカフェで本当に色々なことを学ぶことができた。

そして冬の過ごし方も。氷点下の日が続く冬も、雨の日も雪の日も、パパやママ達が大きなベビーカーと共に外に出ていることが日常であること。
ある時、私は日本の先輩ママにこんなことを話したことがある。「雨や雪の日は傘をさしながらベビーカーを押すのは無理。やっぱり帽子をかぶるしかないですよね。」すると「あらやだ、雨や雪の日もお散歩してるの?そういう時は室内にいればいいじゃない？」と返された。
そうか、そういう手があったか！家の中だけで遊ばせるという考えが私の頭には全くなかった。スウェーデンではそんなことをしていたら冬の間は一歩も外に出られないから。すでに私の育児はスウェーデン流になっていたのだろう。
寒いから、風邪をひくから・・・なんて言ってはいられない。10分も歩いていたら凍りつきそうな空気の中、グローブのような手袋をはめて1時間もブランコを押す私。耳が切れそうに痛くなる。
子供がいなかったら間違いなく室内で冬を過ごしていたであろう私を変えたのは、スウェーデン人とその子供達なのだ。

一番身近に感じた「スウェーデン流」は、見知らぬ人が見知らぬ子供を叱るということ。これは一昔前の日本の光景だ。他人の子だからといって、そこに躊躇はない。
実は私も隣に住むおじいさんには何度も同じことで叱られた。初めての冬に、子供を抱いて裏にあるコンビニまで一っ走りする際のこと。「自分はブーツを履いていて、子供には靴下だけかい？」と。たかが走って30秒の、裏のコンビニなのに。
子供を見守る目は至るところに存在する。ほんのちょっと、と思ってもなぜか毎回見つかってしまうのだ。そこでヨチヨチ歩きもできない我が子に、小さな小さなウールの靴を買って履かせてみると、なぜか私の気持ちまで暖かくなったではないか。私はおじいさんの言っている意味が分かったような気がした。

社会全体で子供を育てる」という考え方と環境が、スウェーデンでは見事に成り立っているように思えた。これは私が2年スウェーデンで暮らし、実際に育児体験をしてみて強く感じたことである。

目次へ戻る　　このページのTOPへ戻る

JISS 社団法人スウェーデン社会研究所
Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies

JISS所報－No.332－2005.9.30

目次へ戻る

2005年6月29日　第39回スウェーデン研究連続講座

スウェーデン芸術シリーズ　No.4
ストリンドベリーをめぐる私の詩想

詩人
白石　かずこ

私は1998年、ストックホルムでストリンドベリーに会った。
会ったといっても、すでに九十年近くも前にこの世を去った人である。私が彼に出会ったのは、詩人白石かずこのイメージの中でである。
彼は深い霧の洞窟の中で一人で書物をひもといていた。その時のイメージと、彼への想いが膨らみ、私は彼に捧げる詩を書いた。本日はその詩を皆さんの前で朗読したいと思う。併せて私のイメージするストリンドベリーの人物像についても語ってみたい。
皆さんの中には現代詩はまったく分らない、聞いても頭が痛くなるばかりという方もおられると思うが、そういう方にも現代詩の詩人がどのように詩想を膨らませ、どうやって詩の形にもっていくのか、その感じを掴んで頂けたらと思う。
（ストリンドベリー：1849－1912　スウェーデンの作家、イプセンと並ぶ北欧近代文学の先駆者、小説「赤い部屋」、戯曲「令嬢ジュリー」など）

私とストリンドベリー

私はストリンドベリーの専門家ではない。むしろ、彼の作品も含めて彼のことはよく知らないと言ったほうがよいのかもしれない。
私をストリンドベリーの世界へ引き込んだのは、スウェーデンの女流作家で親友でもあるハイリー・ホー・ボーンである。彼女は1988年ストックホルムで開催されたストリンドベリー祭に私に来るよう誘ってくれ、事前に「これを読めば彼のことはすべてわかる」と言って1冊の本を呉れた。その本をロンドンで1ヶ月かかって読むうち、私の心が彼の心の中にスウッと入っていった。
このように人の心と心が、魂のレベルで場所も時代も年代も超えて通じ合える、というところが詩人の特質なのである。いわばシャーマン（巫女）のようなものだと思って貰えればよい。
例えば芭蕉の弟子の其角（きかく）とは、私は大の親友である。其角は三百年も前の人だが、その時代に彼はすでに「星の匂い」という言葉を使っている。これは現在の言葉で言うならば「イマジズム」、「モダニズム」というべき感覚を其角はすでに持っていたということである。そしてそのような感覚の世界において共通の接点が持てれば、詩人は時空を越えて人と心を通じ合うことができ、そこから詩も生れるのである。
ストリンドベリーと私の接点といえば、子供の頃不幸な人生を送ったというところにあるのではないだろうか。特に二人共、世間的には立派な父を持ち、そして父を尊敬しつつも憎みながら育ったという点では、人間形成上共通するところがあると言えるであろう。
ハイリー・ホー・ボーンから貰った本でストリンドベリーのことを知った私は、ストリンドベリー祭に参加すべくストックホルムへ行った。そして彼が死ぬまで住んでいた彼の部屋を訪ねた。そこで見たものは、電気もストーブもなく、バスもなく、固いベッドと木の机だけの暗くて寒い陰惨な部屋であった。その中で机の上の鉛筆の芯の先がすべて鋭く尖っていたのが、彼の潔癖性と完全主義を見るようで印象的であった。
また私は彼の絵も見た。彼は画家としても一流であった。彼の代表作「嵐の中の海」も見たが、絵への驚くべき天才ぶりを感ずると共に、彼の心の中の暴風雨も見た。
このような様々な体験を通して、私の心は更にストリンドベリーに近づいていった。

ストリンドベリーとの出会い

ストリンドベリーに傾倒する私を見て、ハイリー・ホー・ボーンは私にストリンドベリー祭で何か彼に関するパフォーマンスをするよう強く勧めた。そこで私は、あるビルのバルコニーを舞台にして、即興の一人芝居をすることにした。その芝居では私はアジアから来た巡礼者という役回りになり、ストリンドベリーと対話をするという形となった。その中で私の前に出てきた彼は、恐ろしく神経質で、心は苦悩と悲しみに満ち、人の愛に飢えながら人にそれを求められない人物として現

れた。この芝居では、最後に私が彼に「救ってあげるから私のところへいらっしゃい」という台詞を述べて終ったのだった。

ストリンドベリー祭が終っても、私の心はずっとストリンドベリーで一杯だった。ストックホルム空港へ向うバスは深い霧の中を走っていた。その時私は、深い霧のたちこめる「魂の洞窟」の中に、彼が一人で悲しげに書物をひもといている姿を見た。その時見たイメージを更に膨らませ、私は「魂の洞窟—霧たちこめ」というストリンドベリーに捧げる詩を書いた。その詩を、ここで皆さんの前で朗読する。

詩の朗読

（注　下記の詩は会場で朗読された内容を、聞きとれる範囲内で記録し、そのごく一部を掲載したもので、使用している文字や節の区切りなどは原典に準拠したものでない）

魂の洞窟ー霧たちこめ

霧たちこめ、天は曇り晴れることを知らず
　　昼は闇となり、ヒマワリのかわりにコオモリの花咲く
コオモリの花咲き、羽音させ空を飛び交う
　　百年前の魂の洞窟はいまもそこに
霧たちこめ、愉悦の声とうめき声
　　声のほか人間の姿は見えない
人間は人間でないのかもしれない
　　———中略———
コウモリ飛び交うあなたの魂の洞窟
　　そのぶ厚い書物をめくる
すると天の声と地球のうめき声の間で
　　女と男がいつまでも終らない
エクスタシーのダンスを踊っているではないか
　　互いに罵詈雑言を投げ合いながら
　　———中略———
魂の洞窟、霧たちこめよ
　　その痛み、その傷、その苦悩、その罪
すべてが愉悦に変るまで
　　コオモリたち、　愉悦の交接にふるい
悪臭はなち、乱舞し、蛇たち空の虹となり
　　この洞窟、天へと無限空間へと浮上するまで
霧たちこめよ、霧たちこめよ

私の中のストリンドベリー

私は、ストリンドベリーという人は、真実とぶつかり合い、真実の矛盾に悩み、真実と闘うだけ闘って苦悩のうちに死んだ人だと思う。彼の戯曲「令嬢ジュリー」や「恋の火遊び」の中での、あそこまで徹底的に追い詰めた、針やナイフの先を思わせる台詞の連続は、その苦しみの表われだと思う。

私の心の中に入ってきたストリンドベリーは、其角のように親しい間柄になれる人ではない。本音を言えば、もし現実にそばに居たとしたならば逃げ出したくなるような人物だ。しかし私には彼の苦しみがよく分かる。私には彼のことがいたましくてならない。私でできることなら私の魂で彼の魂を救ってやりたい。

私は今でもストリンドベリーに、「こちらへいらっしゃい。抱きしめてあげる」と言いたい気持ちで一杯である。

（講演抄録文責　JISS所報編集部）

目次へ戻る　　このページのTOPへ戻る

JISS 社団法人スウェーデン社会研究所
Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies
JISS所報－No.332－2005.9.30

目次へ戻る

2005年7月29日 第40回スウェーデン研究連続講座

スウェーデン産業シリーズ No.20
人間工学を核にした
機能と美しさを叶えるエルゴノミデザイン

エルゴノミデザイン・ジャパン
社長
ダーグ・クリングステット

本日は、ストックホルムに本社をおく北欧最大の工業デザイン事務所「エルゴノミデザイン社」について、この会社の概要、ビジネスエリア、当社デザインの特徴、そして今まで手掛けてきたデザインなどについて、実例を示しながら紹介すると共に、なぜこのような工業デザイン会社がスウェーデンで生れ、育ってきたかという背景についてもお話ししてみたいと思う。

エルゴノミデザイン社の概要

エルゴノミデザイン社は、1969年ストックホルムで設立された工業デザインの会社である。現在この会社には30人のデザイナーがいる。30人の会社といえば小さい会社というイメージであるが、北欧の工業デザイン会社で有名なポルシェデザイン社でもデザイナーは13人であり、30人を抱える当社は、工業デザイン会社としては北欧最大と言えるのである。当社の取扱うデザインは人間工学にもとづいたデザインというところに特徴がある。（ちなみに「エルゴノミデザイン」とは「人間工学デザイン」という意味である）

人間工学にもとづくデザインとは

普通デザインといえば、商品の外観を良く見せるための技術のことをいい、技術の分野としては美術、工芸など芸術の分野に属する。一般には工学（エンジニアリング）とは関係がない。

これに対して人間工学にもとづくデザインとは、人間の体に合うことを目的にしたデザインのことをいう。そして技術分野としては、工学（エンジニアリング）分野に入る。従って当社のデザイナーには学校でエンジニアリング（人間工学）を学んできた人が多い。

当社のデザインのビジネスエリアと特徴

当社のデザインのビジネスエリアを、需要の多い商品順に並べると、一番多いのは医療機器、医療パッケージ、次いで工具、安全機器、それから幼児用商品、コンシューマ商品、ユニバーサルデザインとなる。いずれも日常の生活で、人と物が密接かつ頻繁にコンタクトする商品が多い。 当社のデザインはどういうところに特徴があるかといえば、それは当社で行っているデザインのプロセスを知ることで理解して貰えると思う。そこで以下にそのプロセスを説明する。

当社のデザインのプロセス

当社では、客先から注文があると、（1）「予備調査」→（2）「デザインテーマの決定」→（3）「創造的作業」→（4）「商品デザインの実現化」というプロセスに沿ってデザインを進め、製品化につなげる。

（1）「予備調査」

デザインプロセスの最初に「予備調査」のステップを設けたところに、当社のデザインの最も大きな特徴がある。普通のデザイン会社ではこの「予備調査」にあたる作業はしない。当社では「予備調査」の前にデザイナーが商品の絵を描くことをルールで禁止している。 「予備調査」では、まずデザインの対象となる商品について、“どのような人が使うのか”、“どのような環境で使うのか”、“今まである商品の良いところは何か、悪いところは何か”を、すべてのユーザーから聞き出す。ここで「すべてのユーザー」といったのは、その商品を直接使う人だけでなく、その人に関係するすべての人を含むからである。この作業をユーザースタディという。徹底したユーザースタディで得られた情報をもとに商品を使う上での“問題点の分析”、“トレンド分析”を行い、商品開発の“ビジョン”と“戦略”をたてる。

（2）「デザインテーマの決定」

「予備調査」ですべての問題が洗い出され、ビジョンと戦略がたてられたところで、「デザインテ

ーマの決定」をする。

(3)「創造的作業」

デザインテーマが決定されると「コンセプト開発」に入る。このステップにおいて具体的なデザインが提案され、試作モデルが製作される。そしてこの 試作モデルを用いてユーザーテストが行われる。

(4)「商業デザインの実現化」

ユーザーテストですべての問題が解決されていることが確認されると、サーフィスモデリングが行われ、「最終デザイン」へと移行する。ここで「実現化」 のための諸資料が作成され、それにもとづいて「製品化」が行われる。

人間工学デザインの例

ここで本日持ってきたいくつかの商品を実際に見て頂きながら当社が今まで手掛けてきたデザインの例を紹介する。

●握力の弱い人のための食器

リュウマチ等で手首が動かせない人でも扱えるフォークとナイフ。手首に力を入れなれなくても扱えるので健常者にも利用されている。

●マジックハンド

体の動かない人でも、マジックハンドを持って指先の簡単な操作で床に落ちている1円玉のような小さな物も拾える。プラスチック製なので非常に軽く、 誤ってマジックハンドが手から離れても、指にひっかかって落ちない工夫がされている。

●スチュワーデスの使うコーヒーポット

SASの乗務員の労働組合からの要請でデザインしたもの。スチュワーデスが 重いコーヒーポットの連続のお茶注ぎで手首の腱鞘炎を起こさないようデザインされたもの。今では40以上の航空会社で使われている。

●針の見えない注射器

成長ホルモンなどを10才～15才の子供が自分で注射をする際、注射針に恐怖心を持たないようデザインされた注射器。

●呼吸困難者のための呼吸機

非常に大掛かりの装置であったものを、小型で誰でも扱えるようにしたシーメンスの呼吸機。このデザインにおいては、ユーザースタディで患者のみならず医師、看護婦、患者の家族、友人、病院内の掃除人など患者に関係するすべての人から問題点を聞いた。今は世界市場の半分はこの呼吸機を使っている。

●幼児の食器

幼児の喜ぶ可愛いデザインで特に変わったところのない食器であるが、幼児がお皿やスプーンを引っくり返さないようになっている。軽くて持ち運びがし易く、皿洗いも簡単。

●手の中で滑らないドライバー

ドライバーは柄を丸くすると扱いやすいが、手の中で滑りやすい。これを丸い柄のままで、手の中で滑りにくくした。1本9,000円と高いが、普通のドライバーに較べてトルクは2倍である。

なぜこの会社がスウェーデンで生れ育ったか

この会社の目指している「人間工学にもとづいたデザイン」がどういうものかということがお分かり頂けたと思うが、なぜこの会社がスウェーデンで生れ育ったかについてお話ししたい。

第一にあげられるのはスウェーデンは広い国土に少ない人しか住んでいないこと：人は深い森の中で人の助けを借りずに道具を使わなければならない。そのため人が扱う機材はできるだけ人間工学的であることが求められた。

第二は労働組合が強いこと：組合員が使いずらいとか、不安全と思ったものは、組合が会社側に改善を求める風土があった。

第三は男女平等の進歩：、主婦が皆働くようになり、昔専業主婦によって使われていたキッチンなどで、道具類を使い易くすることが求められた。

第四は急速な老齢化：スウェーデンは世界で最も早く老齢化社会に入った国であり、そのため老齢者用の機材の開発の必要があった。

そしてこれ等の要望、要請に対して、国が率先して人間工学的機材の開発を推進し、企業での開発にも積極的な支援をしたという状況が、当社の発展の背景にあったといってよいであろう。

（講演抄録文責　JISS所報編集部）

目次へ戻る　　このページのTOPへ戻る

8

JISS 社団法人スウェーデン社会研究所
Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies
JISS所報－No.332－2005.9.30

目次へ戻る

スウェーデン人の見た日本、日本人の見たスウェーデン

インターンシップを通して見た日本の会社生活

チャルマース工科大学
タロー・ムカエ

私は、チャルマース工科大学に提出する卒業論文のための研究を、2004年の10月から5ヶ月間川崎にある東芝の中央研究所のインターンシップで行いました。このインターンシップは私にとって日本の大会社で働く最初の体験であると共に、日本の社会、文化や人々、またその暮らしぶりを会社生活を通して内面から見ることができるという、大変興味深い機会でもありました。その初めての日本体験で、私が驚いたり意外と感じたことの中からいくつかを取り上げて述べてみたいと思います。

東芝は永い歴史のある大会社ですから、古くからのしきたりがあります。我々インターンシップもそのしきたりに従い、インターンシップの期間は、築後40年という伝統ある東芝のいわゆる「独身寮」で生活することになりました。そしてこれは後で分かったことですが、東芝の研究所の多くの同僚や先輩も、かっては同じ寮で生活したことがあるとのことでした。ということは、皆入社以来会社を変っていないということになります。このことはスウェーデン人の感覚、特にそれが研究者ということからしますと、とても異例という感じがしました。
この「独身寮」なのですが、40年間日本の地震と台風に耐えてきたのですから住むには安全な所なのでしょうが、内部の設備というと、私や他の外国からの留学生にとっては、世界で第2の経済大国の建物の設備というイメージからかなりかけ離れた伝統的な物でありました。そのため冬の寮の寒さは格別で、私はスウェーデンでこんな寒い冬は体験したことがありません。
私のガールフレンドがスウェーデンから私の寮に訪ねてきたことがあります。ところがしきたりにより彼女は寮に入ることができませんでした。これには驚きました。スウェーデンでは未婚の男女が結婚を決意する前に、お互いをよく知るために一緒に暮らすことは普通に行われていることだからです。

私は東芝が外国からのインターンシップを受け入れているのは素晴らしいことだと思います。日本と他の国の関係を緊密化するには非常に有効だからです。こういう制度をとっている会社ですから、日本人は一般的には英語は苦手と聞いてはいましたが、研究所の人は高度の教育を受けた人達ばかりですから、英語の力は平均以上と思っていました。ところがこれは認識違いだったようです。研究所の人達は英語の文章を書くのはとても優れているのですが、自分の考えを口で表現するのはやはり苦手であることが分かりました。
幸いなことに私は日本に来る前に少し日本語を勉強してきたので、日本人との付き合いで不便を感ずることはありませんでしたが、日本語が分からない留学生にはこの現実は厳しく、日本で英語でのコミュニケーションがうまくいかなくて、何のために日本に来たのか分からなくなった人もいるようです。

個人的には、私は多くの日本人の友人ができました。特にサッカーを通じて親しくなった友人が大勢います。皆本当に優しく、親切で、親しく付き合ってくれましたが、それは私が日本の言葉が分かり、日本の文化に慣れているということがあったからかもしれません。私は血筋的に日本人の血も流れていることもあり、飲み会で皆にお酌をして回る日本的習慣などは結構抵抗なくできるのです。そのように日本流には馴れている私ではありますが、日本の人がアルコールが入るとうって変ってフランクになることについては、ちょっとびっくりしました。
私の体はスウェーデン人としてはよくあるがっちりした体格なのですが、それが例え相撲取りのように大きかったとしても、スウェーデンでは面と向かって体重の話をする人はいません。日本の友人はお酒が入ると、私が太り過ぎだと言い、身長と比較してもっと体重を落としたほうが健康によい、などと言うのです。どうも日本の人にとっては、体格だけでなく何事によらず一般的標準からかけ離れていないほうがよい事のようです。

終わりに、私の日本についての私の感想は、といえば、日本は人々も文化も本当に魅力的で大

好きです。ただ社会の中に入って感じたことは、日本の人は皆もっと思い切って職場を変ったらよいと思います。個人個人は経験が豊富になるし、会社にも貢献が出来ると思うからです。そうすれば日本の社会はもっと活気が出て発展するでしょうし、私も更に日本が好きになる気がします。

企業内に見るスウェーデン人の性格

スウェーデン社会研究所
国際部長
芦澤　潤

典型的な日本企業のサラリーマンであった私は、定年が近づく頃、それまで勤めていた会社の方針もあってスウェーデン企業の日本法人に移り、そこで10年間勤務しました。スウェーデン企業なので当然スウェーデン人が圧倒的に多い環境だったのですが、他にも実に多くの国籍の仲間達（上司、同僚、部下）と仕事をする経験をしました。

その中で特にスウェーデン人と日本人社員の行動の違いについて、いくつか気が付いたことがあります。その違いを、この会社が世界中の社員を対象にした研修の中で外国人の性格を比較する尺度として用いている5次元のモデル、（1）「個人主義・集団主義」、（2）「男らしさ・女らしさ」、（3）「権力格差容認」、（4）「不確定性回避」、（5）「儒教的考え方」の統計データ（SWEDECHRIS社の調査による）を引き合いに出しながら、私の見たスウェーデン人の企業内行動を述べて見たいと思います。

（1）個人主義・集団主義　：（個人主義度はスウェーデン71に対して日本46）
●人事異動による交代でも、職務内容の引継ぎという手続きをしない（後任者はその人の個性でやればよいということか）
●部下の個人的問題で業務効率に影響があっても上司から相談を申し出ることはしない（部下への気配りはあまりしない）
●部下の成果をめったに褒めない
●同僚と飲みに行くことが少ない
●管理者でも自分の後任者の育成はしない

（2）男らしさ（物質的成功が価値）・女らしさ（生活の質向上が価値）　：（男らしさ度はスウェーデン5に対して日本95）
●会社で何があっても（納入した機械が火事になっても）休暇は取る（生きるために働く）
●日本駐在中の経費として洗濯石鹸や雨傘の代金まで請求する例があった（却下した）
●会議中でも奥さんからビデオデッキの調子が悪いという電話が入る
●一時帰国で留守にするアパートで、湿気で家具が傷むという理由で不在中エアコンはつけっぱなしにしておく

（3）権力格差容認（上位者に近づき難い、権力者が特権を持つ度合い）　：（スウェーデン31に対して日本54）
●役職の上下に関わらず、誰とでも対等の立場で話す
●客先に対しても企業間の立場は対等という考え方で接す
●組織変更で役職上の上下関係が入れ替わっても気にしない
●役職への登用は全く男女の差をつけない。日本人はそれに慣れていないため、管理職に突然任命された日本人女性はしばらく泣いてばかりいた（参考：最新のUNDP報告によると「女性の政治・経済分野進出度」はスウェーデン3位、日本はタンザニアについで43位）
●企業実習に来たスウェーデン学生の報告書の内容を、そのまま検証なしで経営に反映させようとする

（4）不確実性回避（意見相違を嫌う、完璧主義の度合い）　：（スウェーデン29に対して日本92）
●納入した製品に問題あるときは、その製品を交換すればよいという考え方をする
（日本はZD運動で最初から完全無欠が目標）
●下請け会社の責任は自分たちの会社の責任ではないと主張する

（5）儒教的考え方（長期志向で忍耐力で将来のために蓄える度合い）　：（スウェーデン33に対して日本80）
●会社の業績は当面の株配当に最も重点を置く
●日本の会社における中長期事業計画のようなものは作らない

以上、スウェーデンの一企業の中にいて、日本の企業風土とは違うと感じた具体的事例をいく

つか述べてみました。
　ただ、私はスウェーデンの会社に長く居りましたが、スウェーデンに長期駐在した経験はありませんし、他のスウェーデン会社に勤めたこともありません。従いまして私がここで述べましたことは、スウェーデン人の企業内行動や性格の一般論とは言えないかもしれない、ということを最後に付け加えておきます。

目次へ戻る　このページのTOPへ戻る

JISS 社団法人スウェーデン社会研究所
Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies

JISS所報－No.332－2005.9.30

目次へ戻る

随想

スウェーデンの坊やと湖そして僕の夢

NHKラジオアナウンサー
ハンス・カールソン

腰が痛い！もう立ち上がらなくてはだめだ！僕はカメラを置いて背中を伸ばした。三十分ほど前から可愛いらしいvitsippor（ヤブイチゲ）というスウェーデンでは春を告げる草花として名高い小さな白い花の写真をアップで撮影しようと懸命になっていた。しかし横になって写真を撮ろうとして姿勢を崩していたので、それに気が付いたときにはすでに腰がくだけていた。

ようやく立ち上がって周りを見渡すと、南ダーラナのソールビーク村の美しい風景が目の前に広がっていた。僕のすぐそばに小さな湖があって、陽に輝き、その向こうの丘の上にはいかにもスウェーデンらしい赤い壁の農家が見えた。農家の牧場には馬が何頭か放し飼いにされていて、おいしそうに草を食んでいた。湖畔に沿ってサイクリングロードが一本走っていた。でも人の姿は一人も見当たらない。ああ、五月の空気はおいしい！吸ってみると、自然そのままが体の中に入り込むような気がした。

その時だった。サイクリングロードのずっと向こうに小さな人影が現われた。こっちに向かってくるようだった。誰だろう。近付いてくると、それが幼い坊やであることがわかった。坊やは補助輪が付いた自転車をこいで、ヘルメットをかぶっていた。僕の足元まであと五メートルほどのところで自転車を止めた。五、六歳ぐらい男の子で、とても可愛いらしい顔立ちをしている。

「こんにちは」とその坊やが言った。知らないよそのおじさんなのに、まったく怖がっている様子がない。

「こんにちは」と僕は応えた。

男の子はしばらく黙って、湖を見ていたが、僕の方に振り向くと、こう言った：

「おじさん、綺麗な湖だね。」

僕は驚いた。いや、驚くというよりも痛く感動した。五、六歳ぐらいの男の子がいきなりこんなことを言うものだろうか。

「うん、そうだね。」と僕は応えた。もっとうまい返事をしたかったが、どうもそれしか出てこなかった。　でも、坊やは満足そうな顔をしてそのまま走り去っていった。しばらくすると姿も消えてしまった。

東京に帰って僕は、もうかれこれ十五年は暮しているいつもの日本の生活に戻っている。そうして時折この小さな出来事を不思議と思い起こすのである。

僕のマンションの前で遊んでいる子供たちを見ると、なぜかこの坊やのことが頭に浮かんでくる。マンションの両側にある広い大きな道路を車がびんびんと走っている。どこを見てもコンクリートのビルばかり。毎日のようにスピーカーからスモッグ警報が流れてくる。

こういう時ふと僕は思う、この子供たちは誰かに向かって「綺麗な湖だね」と言ったことがあるであろうか。というより、そんなことを感ずることがあるであろうか。そのような子供が日本にもまだいるのであろうかと。

このあいだ僕はNHKのテレビ番組で禅の坊さんの講話を聞いた。その坊さんの 話によると今の日本人には自分の道が分からなくなってしまう人が多いとのことである。そのようなことは考える暇もないと言ったほうが早いのかもしれないが、細かい事の選択で悩んでばかりいて、自分や自然のことを大きなスケールで考えられない人が多い。たとえば自分が存在していること、自分が息をしていること。「生きる」ということは「息をすること」。こういうことを意識するのが禅だとその坊さんは言った。

自分が存在するということは、それ自体が奇跡である。そのことをストレスで倒れそうな大都会の日本人は忘れている。「よい大学」に入学するために受験勉強でデータを吐き出すまでに暗記する。「よい会社」に就職するために就職活動で一生懸命に努力する。「よい老後」の生活を送るために全力で頑張る。しかし、すべてを言われた通りにやったとしても、結局何がよかったのか分からない人が沢山いる。本来の自分を見つけないかぎり何が自分のために本当に役に立つのかが分か

らないからである。

自分を知るには自分を探す旅に出るのがよい。自分は本当は誰なのか。自分は本当に何を求めているのか。その本来の自分は誰なのかということを認識するために、忙しい日々の生活を忘れ、町を離れて頭の中を空にし、静かに自然の中で呼吸をし、その呼吸が出来るということの素晴らしさと、その呼吸を支えて来た自然の素晴らしさに気付くことが必要である.。こういう話をその坊さんはした。

僕はこの話を聞いて、もう一度あの男の子のことを思い出した。そしてあんなに強く僕を感動させたあの子の言った言葉の真の意味がやっと分かった気がした。どうしてあんな小さな子供なのにあの子は湖の美しさが分かるのであろうか。それはまだ自分を失っていないからに違いない。あのような環境で生まれ育つと、大きくなって、たとえば会社でどんなに上司がうるさくても、いつまでも湖は心の中で輝いていて、その湖と比べれば、それがどんなにくだらないものかがよく分かると思うのである。うるさく言う人には騒がせておけばいいのである。仕事でも勉強でも本来の自分を見失わなければ、いつでも道は開けるのである。あの男の子は幼くても恐らくそういう心を持って生きているのであろう。

スウェーデンでは自然はいつもすぐ近くにある。いわゆる先進国の中でもスウェーデン人ほど自然がアクセスしやすい環境の中で生きている人間は少ないと思う。僕は特に東京に住み始めてからそれが分かるようになった。東京という鏡の中に僕の故郷、そして僕の本来の自分の姿が映っている。本来の自分を見つけるためには長いあいだ海外に住むことは本当によいことである。
しかしそうは言っても、生まれてから東京でずうっと暮らしてきて、他の世界を知る機会のなかった人はどうすればいいだろう。また別の国に行けたとしても、たとえば忙しいパックツアーでしか行けないような人はどうすればいいのだろう。

東京や大阪のストレスの中で本来の自分を見失わないようにすることは困難なことかもしれない。しかし日本人は元来、自然を愛する民族であったことも事実である。それが頭に浮かんだことがヒントになって、僕は今の日本人にもスウェーデン人ように自然にアクセスできる環境を味わって貰いたい、と思うようになってきた。そしてそれを実現するために、現在具体的に活動を始めている。
日本人の心にいつの日か、多分以前そうであったようにもう一度湖が輝くようにすること、そしてそれに少しでも寄与すること、これが今の僕の夢である。

編集部より
この随想の執筆者ハンス・カールソン氏（1959年中央スウェーデンのルドビーカ市生まれ）は、ラジオアナウンサーのほか、プレスポート（埼玉県川口市）のパートナーとして、日本、スウェーデン間の交流プロジェクトに参加して活動中です。2004年にはスローライフ（Slow life）というテーマでスウェーデンへのモニターツアー、報道機関のための取材ツアーなどを企画し、またその中で本年（2005年）は、在スウェーデン日本大使である大塚清一郎氏のルドビーカ訪問も実現させました。現在は「スローライフハウス」というプロジェクトで、南ダーラナにあるルドビーカ市市営分譲住宅の12戸マンションをリフォームして、物価が高いといわれるスウェーデンでも、超低額で日本の方々にスウェーデンでのロングステイができる環境を提供する活動に力を入れております。このプロジェクトにご関心のある方はメールでhanske@pressport.info.,または電話080-5654-7174にご連絡下さい。

目次へ戻る　このページのTOPへ戻る

JISS 社団法人スウェーデン社会研究所
Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies
JISS所報－No.332－2005.9.30

目次へ戻る

JISS所報原稿募集

JISS所報原稿募集

ISS所報では、北欧・スウェーデンの歴史・政治・経済・社会制度などを研究しておられる方、公的機関や福祉・環境・教育などの社会活動機関、企業活動等での交流を通じて北欧・スウェーデンに興味をお持ちの方、あるいはJISSやJISS所報にご意見をお持ちの方々からのご投稿を広く募集しております。
応募方法は下記の通りですので、ふるってご投稿下さい。所報の編集方針に従って逐次掲載してゆきます。

1 応募資格
特にありません。ただし氏名・所属・連絡先は明記下さい。匿名の投稿は受付けません。

2 内容と字数
北欧・スウェーデンに関するものであれば内容は自由ですが、800字（程度）、1，600字（程度）、3，200字（程度）のいずれかの文長でお願いします。
（まだ文になっておらず、テーマ、アイデアの段階であっても、投稿ご希望であればお気軽にJISS所報編集部にご相談下さい）

3 掲載の可否と掲載時期
掲載の可否、掲載時期の判断はJISS内の所報編集部で行います。送られた原稿は返却しませんのでご了承下さい。

4 謝礼
ご投稿への謝礼は無料ということでお願いいたします。

5 原稿の送付先
原稿は、「JISS事務局 所報編集部」宛て、Eメール、郵便、またはファックスにてお送り下さい。

目次へ戻る　このページのTOPへ戻る